



河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

# 教育を 読む

『イリオス』『オデッセイア』は、大抵の日本人が子どもの頃読んだはなしである。いずれも、吟遊詩人ホメロスによって語られたといわれる物語である。

『イリオス』はアカイア(ギリシャ)とトロイとの戦争の話で、例のトロイの木馬がでてくるやつである。お馴染のアキレスも登場する。アキレスの母親は赤ん坊のアキレスを不死身にしようと、冥府の川に漬けたのだが、そのとき踵をつかんで漬けてしまったので、踵が不死身でなく急所になってしまった、つまり「アキレスの踵」になってしまったという話である。

『オデッセイア』はイタケーの王であるオデッセウスが、トロイア戦争の勝利の後に凱旋する途中で、出会ったさまざまな出来事の話、10年間の漂泊の物語である。乗ってきた船の船員たちが魔女のため豚にされてしまう、またセイレーンという



## 『古代への情熱—シュリーマン自伝』

シュリーマン・関 楠生訳  
新潮文庫  
定価 本体 460 円 (税別)

怪物たちの歌を聴くと、記憶を失い食べられてしまうなど、恐くて、おおらかで、面白いはなしである。

さて本書評の『古代への情熱』を書いたシュリーマンも、子どもの頃これらの物語を父親から聞かされた。面白くて何度も話をせがんだ。シュリーマンが常人と違うところは、これらの昔話が次第に本当にあった話と思い込みはじめたことだ。

しかし現実の世界では彼は普通の子供として成長する。実業学校を卒業して雑貨屋の見習い、帆船のボーイ、事務所の小間使い、やがて独立して藍商人として莫大な富を得る。だが彼は単なる金持ち志向ではなかった。お金持ちになって、いつかトロイアの地で『イリオス』『オデッセイア』が現実にこの世に実在したはなしであることを、証明しようとしたのだ。その野望が満たされるときがきた。

1871年10月、トルコ政府の許可を得て発掘が始まった。そして1873年5月、ついに城壁と門を発見する。これがトロイアであったのだ。少年の直感と綿密な予測的中したのだ。さらに掘り進むと「1ポンドもある黄金の杯、大きな銀の水差し、黄金の王冠、腕輪、数千枚の金の小板を苦勞してつなぎ合わせた

首飾り、それは、この地方の強力な支配者でなければ所有しえないきらびやかな宝だった」が出土する。

本書の読者はこのあたりで、自分が大黄金を掘り当てたような幸福感を味わうのである。

さて本書の執筆者シュリーマンは、銀の匙をくわえて生れてきた幸運児に見えるが、実は大変な勉強家であったことが、この自伝でよくわかる。例えば言語はラテン語、スウェーデン語、ポーランド語、ギリシャ語、古典ギリシャ語、ロシア語、アラビア語、英語など、ほとんど独学でものにしている。やっぱし天才は違うと思いがちであるが、彼はこうも書いている。

「私はどんな言語でもその習得を著しく容易にする方法を編み出したのである。その方法は簡単なもので、まず次のようなことをするのだ。大きな声でたくさん音読すること、ちよとした翻訳をすること、毎日一回は授業を受けること、興味のある対象について常に作文を書くこと、そしてそれを先生の指導で訂正すること、前の日に直した文章を暗記して、次の授業で暗誦<sup>あんじょう</sup>すること、である」

なんだ、ちっとも容易でも簡単でもないじゃないか。